旧グラバー住宅

トーマス・ブレイク・グラバー(1838~1911 年)は、1859 年の国際貿易のための開港後、日本に最初にやって来た西洋人の一人で、長崎港でビジネスに成功した最初の人の一人でもある。グラバーが住んでいていたこの家は、1863 年に大工の棟梁、小山秀之進(1828~1898 年)によって建てられた日本で現存する最も古い西洋風の家の一つである。小山はすでに東山手に英国聖公会を建てており、後に丘の上に旧別邸を建てた。

グラバーは 1859 年 9 月にジャーディン・マセソン商会で働くために長崎に来たが、三年間でグラバー商会を始めた。1861 年には南山手の 3 番と 1 番の土地を取得し、港を見下ろす豪邸建設に着手した。彼の会社は急速に成長し、西洋に茶、材木などを輸出し、日本に鉄砲、機械、蒸気船を輸入した。

彼の主なつながりは、西洋の技術を身につけ、徳川幕府を倒すことに関心が高かった薩摩藩(鹿児島)や長州藩(山口)などだった。グラバーは、幕府の禁止令にもかかわらず、若きサムライたちの渡航を手助けしていた。また、日本の初代総理大臣でもあり、明治憲法起草のリーダーである伊藤博文(1841~1909 年)と生涯の友であった。

1868 年の明治維新後、グラバーは日本の造船・鉱業の産業化を支援するためにより積極的な役割を果たした。彼は、薩摩藩による日本初の蒸気動力式船台の建設や佐賀藩が日本初の近代的炭鉱である高島炭鉱を建設するのを手伝った。

グラバーは、妻である淡路屋ツル(1851~1899 年)と二人の子供、倉庭富三郎(1871~1945 年)、ハナ・グラバー(1876~1938 年)と共にこの家に住んだ。1876 年、グラバーは家族とともに東京へ移り、三菱の顧問として働いた。1911 年に東京で死去後、1939 年に富三郎が邸宅を三菱に売却、1957 年に長崎市に寄贈され、1961 年に重要文化財、2015 年に世界遺産に登録された。

建築フィーチャ

旧グラバー邸はバンガロー形式の家で、もともとは英国支配下のインドで英国とベンガルの建築が融合してできたものである。バンガローは瞬く間に大英帝国中に広がった。グラバーは香港と上海でバンガローを見たと考えられている。洋風のデザインが多いが、柱と梁の骨組みが丸石になっているなど、基本的な構造は和風で、壁や屋根も古典的な日本風だが、畳ではなくフローリングで、英国式の石炭焚きの暖炉、フランス式の窓、石畳のベランダなどがある。

この家は、家の曲がり角に建つ巨大な松で知られており、グラバーはその松に「一本松」という愛称を付けましたが、松は倒れ、1905 年に伐採されました。

採用番号 NO：	023-004